

俳壇畸人傳

秀吉と紹巴

明智光秀が、小栗栖で、名も無い土民に、どてつ腹を、ぐさつ、とやられたと聞いた時に、第一番に蒼くなつたのが、里村紹巴だ。

興福寺中明應院の味噌摺り坊主から、偉いものに成りたさに修業した連歌だつた。お蔭で、織田信長の知遇も受け、大いに羽振りをかかせて居たのが、偶々、愛宕山西の坊威徳院での光秀の連歌の會に、發句は光秀で、

時は 今天 が 下知る 五月哉

とやつた。紹巴の代作であるとの噂は洛中洛外に高い。

これが秀吉の耳に入るのは極つて居る。そして、懐紙を見られることも判り切つて居る。すると、首を、ちよん切られてしまふことも明瞭だ。首が無くては生きては居られぬ。紹巴蒼くなるのも尤もだつた。で、紹巴は早速に愛宕山へ駈けつけて、問題の『天が下知る』の懐紙を見せて

貰つて、さて、『天が下知る』の知と云ふ文字を小刀で削つて、其の上に、又以前のごとく知と云ふ字を書いて置いた。

果せる哉、噂を聞いた秀吉、猿面を眞赫にして怒つた。忽ち紹巴を呼び寄せて、

「信長公の恩顧を蒙り乍ら、光秀の天が下知ると云ふ句を代作したのは、即ち信長公を呪咀するものだ、又、たとひ光秀の作であつても天下の名人たる紹巴ともあらう者が句意を悟らぬとは何事だ、貴様は光秀と同罪だ、首を洗つて來たかつ！」

と、怒鳴りつけた。紹巴は、
「ま、待つて下さい、そ、その時は確か、天が下なるとありました、お疑ひでしたら、愛宕山の懐紙を御覽下さい」

と云つた。秀吉は其處で、すぐさま使を出して、愛宕山から懐紙を取寄せた。見ると矢つ張り『天が下知る』とある。さあ、怒つた秀吉、

「不屈者奴がつ、打首だつ！」

と叫ぶと、紹巴は袖をかき合せて、

「あゝ！ 情けない、どう云ふ譯で紹巴はかやうに人に憎まれるのでありませうか、御覽遊ばし

ませ、此の懐紙には先に『天が下なる』と書いてあるのを文字を削つて知ると云ふ字に書き換へてあります」

「何と申す」

秀吉、再び見ると成る程削つた跡がある。

「ふうむ」

唸つた秀吉は、きら／＼光る眼を輝かして、

「さて／＼、其方は才智のある奴ぢや、死罪を免じて城州の地を追放する」と宣告した。

「やれ／＼首だけはつながつた！」

ほつ、とした紹巴は江州の三井寺に蟄居したが、又、太閤秀吉に召出されるやうになつた。

或時だ、秀吉は紹巴に、

「一句出来たぞ、奥山に紅葉を分けて鳴く螢、とはどうぢや」

紹巴は頭を掻き乍ら、

「どうもそれは、季もちがひ、螢が鳴くと云ふことはありませんから」

と云ふと、秀吉の御機嫌は急に悪くなつて、

「それでも構はん、懐紙に書け！」

「いや、そんな、べら棒な句は書けません」

と紹巴は強く争つた。

すると座に居た後の玄旨法印、その頃藤孝と云つた人が、見るに見兼ねて、

「いや、太閤殿下の仰せが尤もで御座る、有名な歌に——むさしのゝしのをつかねてふる雨の螢より外鳴く蟲もなし、と云ふのがありますからなあ」

と云つた。すると秀吉は、

「それ見ろ！」

と鼻高々。紹巴は、べちやんこになつてしまつた。で、其の翌日、紹巴は腹が立つて堪らぬから、藤孝の家に押掛け、

「君の云つた歌は何集の誰れの作だ？」

と問ひ詰めた。すると、藤孝は呵々大笑して、

「きゝ君、そんなの、ないよ、ありや君の首纏ぎだ、これからもある事だ、太閤殿下の意に逆ふ

な」

と来た。

だから、其後秀吉が、

谷かげに鬼百合さきで首ぐなり

と、迷吟をやつてのけた時に、紹巴は、

「名吟に在せられます」

と折紙をつけた。すると、秀吉、

「螢は鳴かぬが百合はぐなりとしたか？」

「はつ、慈鎮和尚が、まくすが原に風騒ぐなり、と仰せられて居りますから」

と酒々として云つた。

「うむ、流石に天下の名人ぢや」

秀吉、すつかり喜んでしまつた。

紹巴は、しかし、間違へてはいかぬ、辻斬などに會ふと、抓んで投げる位の剛の者でもあつた。

惟 然 坊

惟然坊は美濃の國關の富豪だつたが、風雅を愛して、財産を打つ潰してしまつた。芭蕉は、だから惟然坊と旅行した時、惟然坊が、旅寢の木枕が痛いと言つて、帯を解いて、木枕にぐるぐると巻きつけて寝るのを見て、

「惟然は頭の奢りで家産を失つたよ」と、皮肉に笑つた。

が、兎に角、生れつきの無頓着、郷里の篠田と云ふ人の家に滞在して居た時、湯に入つて、さて其處にあつた着物を引つけて、四五里も隔つた家へ遊びに行つてしまつた。處が、篠田の方では、どう云ふものか新妻の衣服が一枚見つからぬ。大騒ぎした末、惟然坊の衣服を發見したので、

「あつ！間違へたんだな」

と、大急ぎで、惟然坊の行つた先を探した。惟然坊は、探し出されて、指摘されると、

「成る程、一寸着心地がいゝと思つたが、道理で、ふわつはゝ、ふわつはゝ」

大笑ひして、裸になつて衣服を渡したといふ呑氣家だ。

でも、流石に名古屋へ行つて、自分の娘が豪家へ嫁入りして居るので、遠慮して會ひにも行か

なかつたのに、道で、ふと侍女下郎を連れて歩いて居る娘と、ばつたり出會つた時は參つたらしい。

逃げようとしても、娘の方で近づいて、綺麗な着物で、乞食みたいな惟然坊に、「お父さま！ お懐しう！」

と、やられた時には、思はず顔を反けて、涙をぼろ／＼こぼし、

兩袖に唯何となく時雨哉

と、娘の手を振りもぎつて逃げたと云ふ。この惟然坊口癖に風蘿念佛と云ふのを稱へた。風蘿とは師芭蕉の號、師の句を和讃にして歌つたのだ。

まづたのむ／＼椎の木もあり夏木立、音はあられか檜木笠、

南無阿彌陀／＼

てな調子だつた。

惟然坊の人生哲學は『有千金不如林下貧』と云ふので

ひだるさに馴れてよく寝る霜夜哉

の句が、よく法悦境を現はして居る、人が惟然に冷笑の眼を向けると、惟然坊は昂然として、

人は知らじ實に此の道のぬくめ鳥
と吟じた。

瀧野瓢水

惟然坊と、よく似た俳人に瓢水がある。瓢水は本名が瀧野新之丞と云つて、播摩加古郡別府村の人、剃髪してからは自得と云つた。

千石船を七艘も持つて居た富豪だつたが、先づ第一に、めちやくちやな遊蕩をやつてのけて、忽ち貧乏になつてしまひ、

「あゝ、清々した、何にもないと樂だ」

と、いゝ氣になつて風流に遊んだ。

此の瓢水、近村へ、ぶら／＼出かけて、小川の橋を渡る時、瓢々乎として居るものだから、踏みはづして水の中へ、どぶんと落ちてしまった。

これを見た附近の百姓が、驚いて駆けつけて、さて、助け上げようとする、どうだらう、瓢水先生、濡れ鼠になり乍ら、懷中から餅を出して、むしや／＼やつて居る。

「餅を濡らすと大變だ、食つちまへ」

と云ふ譯だ。助けに行つた百姓は、呆れて、開いた口が塞がらなかつた。

瓢水が京都へ行つた時に如流と云ふ畫家が、貧乏を氣の毒に思つて、數十枚の畫を描いて與へ「これに發句を賛して配られたら金になる」

と云つた。瓢水、大喜びで懐に入れて歸つた。さて其の次に如流が會つた時、一向瓢水に金が入つたらしい氣色もない。不審に思つて、

「この間やつた畫は賣れたのか？」

と問ふた。すると、瓢水、きよとんとして、

「あ、あれか、あれなら歸り道に何處かへ落してしまつたらしい、歸つたら無かつたよ」

平氣で答へられて、如流の方が、べちやんこに參つちまつたと云ふ。

有名な俳句、

手に取るなやはり野に置き蓮華草

と云ふのは、大阪の知己が遊女を身請けしようとしたのを諫めた瓢水の句だ。

瓢水の句は風韻がある。亡母の墓で、

さればとて石に蒲團も着せられず

などは、千載の後迄何かを示唆してくれる。

堂上家へ召されて、

消し炭も袖味噌に付て膳のうへ

などは面目躍如として居て、

ほうくと雨そう須磨の蚊遣哉

は、瓢水生涯での秀逸と云はれて居る。

玉垣額之助

出身は肥前國平戸の松浦肥前守の小姓で或は肥前守の落胤かとも噂された玉垣額之助は天下の力士として、本所表町に廣大な邸宅を構へて居て、華美好みで、矯奢な生活をして居たが、お臺所の方は、玄關と正反對、びーくの火の車、酒屋、米屋等が毎日借金を請求に來た。すると玉垣、

「や、これは米屋の御主人、お暑いのに御苦勞、さあ〜」

と、無理やりに座敷へ引つ張り上げた。

「いえ、それより、その金の方を！」

「それは勿論承知で御座る、此の胸が引き受けとる、心配さつしやるな、とにかく、何はなく共珍客ぢや、それ、御馳走せんか」

と云ふ鹽梅で、きまつて、蕎麥を出した。

「いや、蕎麥と云ふ奴は壽命延しで、はゝはゝ、借金もついでに延ばしてしまつて、はゝゝゝ」と云ふ寸法。

珍客扱ひにされて、掛取り連、腹が膨れて、がみ／＼いへなくなり歸つてしまふのが常だつた。處が、たま／＼玉垣頼之助に、金が入つた時は違つて居た。どつかりと床の間を背にして、

「あゝ米屋か、いくらある、うんよし、そればかりの端金、今、奇麗に拂つてゐる、わしは天下の力士、わしのモットウは、これこの俳句ぢや」と、指で徐ろに示すのは床の間の軸の一吟

掛取に待つたは云はず關角力
力であつた。

竹田野坡

長松が親の名で来る御慶哉

月並だらうが何だらうが、人口に膾炙されて居る此の句の作者、野坡も亦畸人だ。

生れは越前、江戸へ出て三井の兩替店に勤めて居たが芭蕉の門下となり、後には大阪に住んで元文五年正月三日、師の無名庵で死んだ。此の無名庵は芭蕉が近江に居た時住居したもので、それを野坡が高津に移して、住んで居たのだ。高津野翁と云ふのは其の爲めである。

この野坡の家へ、盗人が忍び込んだ事がある。

その時、野坡は盗人に、

「いやどうも、折角の御光來乍ら、誠に残念、無駄骨折らせて相濟まぬ、何しろ、此の通り、何にもないのでなあ」

と丁寧に詫びたものだ。盗人が呆れて居ると、

「だが、折角の御來訪、このまゝお歸ししては申譯ない、丁度茶が一斤ある、茶でも飲んで、火にでもあたつて下さい、今夜は寒いから」

と云つて、柴折りくべて泥棒にあたらせた。

泥棒は黙つて、お茶を飲み、火に暖まり、さて、ぎよろり／＼と邊りを見廻すと、机の上に、

草庵の急火を逃れ出て——と端書して、

我 庵の櫻も寂し煙先
と書いてある。

「はゝん、お前さんは俳人ぢやな」
泥棒なか／＼もの判りがよい。

「左様、俳諧を仕る」

野坡が見得を切ると、泥棒は、

「無駄骨折らせた代りぢや、今、眼の前のことを一句詠んでくれ」と要求した。

待つてました——とは云はぬが、

「あゝ。お安い御用」

と野坡が、すら／＼と書きつけた一句、

垣 潜る雀ならなく雪の跡
を見た泥棒君、

「ふーん、なる程、こりや真物に間違ひはない、然らば御免」と、忽ち、垣をもぐつて消え失せた。

十萬堂來山

來山は浪華の人で、生れつき潤達鋭敏、二十に成るや成らずで談林派の宗匠となつた天才だ。處が大好物が酒、酔ふと頗る愉快になる性質で、たうとう或夜舉動不審で其の筋へ引つ張られてしまつた。

來山、昔の留置場へ、ぼーんと投げ入れられて、いゝ氣持ちになり、どんなに名や住所を問はれても云はない。門人の方は師匠が行衛不明になつたと云ふので大騒ぎして、二三日後に獄中に在ることを知つて驚いて訴へ出て、出して貰つた。

「何故名を仰つしやらぬ、あんな辛い處に平氣で居て——」
と、弟子に詰られた來山、妙な顔をして、

「をかした事を云ふね、あそこは自炊の世話がなくて調法だつたのに」
と云つたので、弟子は、みんな呆れてしまつた。

來山は素より貧乏なので、妻君なんかなかつた。妻は土人形、それを相手に、ちびりちびり酒

を飲んだ。そして女人形の記に、

「男はいづこの土工ぞや、あらうつゝなのいもせの物語や」
など、書いて居る。いゝ氣なものだ。

折ることも高嶺の花やみたばかり

これが、妻君あきらめの來山の句だつた。

正月になつたつて雑煮などは食へさうになかつた。で、門弟が雑煮の道具を大晦日に贈つた。
すると來山、

「ありがたい、近頃は酒ばかりで、食ふと云ふことを忘れた」

と云つて、早速其の日に雑煮をして食べてしまひ、

我春は宵にしまふてのけにけり

と詠じた。

寛永五年の十二月に大阪には大火があり、來山の庵も類焼した。

が、さて、急いで集まつた門弟達は、焼けた庵より、何處へ行つたか判らぬ師匠の行衛を索ね
ばならなかつた。

だから、方々手分けして訪ね廻つて居ると、居た〜。

驚く勿れ、處は今宮廣田の森の乞食小屋、しかも、襦衣を纏つて、臭氣紛々たる乞食共を集め
て、俳句の運座を開いて居たのには、

「あつ！」

と云つて、索ねあてた弟子達も開いた口が塞がらなかつた。

一 茶

六歳の時、

我と來て遊べよ親のない雀

と、天才的な句を吐いた一茶は、俳句の中から生れて來たやうな男で、彼の句は、要するに、
彼の『ひりごと』であつた。

一茶を偉大な常識家と、私は思ふが、一茶は、此の偉大な——と云ふことが嫌ひであらう。一
茶自身は、自分の愚を認めて、天下晴れて、お體裁も何もかまはずに夫婦喧嘩もした男だつた。

「御佛は暁の光に四十九年の非を悟り給ふとかや、あら凡夫のおのれ如き、五十九年が間、闇き
よりくらきに迷ひて、遙かに照らす月影さへ頼む程の力なく、たま〜非を改めんとすれば、暗

々然として、盲の書を読みいざりの踊らんとするに等しく、迷ひにまよひを重ねぬ。げに／＼諺に云ふ通り、愚につける薬もあらねば、なほ行末も愚にして、愚のかはらぬ世を經べきことを願ふのみ」

と、自分で正直に折紙をつけて居る。

この一茶、自分の坐像を描いても、

ひいき目に見てさへ寒きそぶりかな
と、やつて居る。

一茶は可哀想に、繼母であつた。で、一茶の父が置くに忍びなくなつて、江戸へ出した。それから四十八になつて、一茶は故郷の土を懐しく踏んだのであつたが、まだ繼母と義弟が一茶を、めちやくちやにするので、

古郷やよるもさはるも茨の花

と吟じて居る。

漸く郷里に落付いて妻を貰つたが、さて、それが毎日、夫婦喧嘩の連続、處が、その女房が、ぼつくり死に、後妻を貰つたが、また夫婦喧嘩の連続で離別してしまつた。

小言いふ相手もあらば今日の月

考へて見ると一茶の生涯は平凡人の淋しさ悲しさを、身を以て句作した一生だつた。或る意味で、私は一茶を自然主義の大家だと思ふ。

寺島鷗笑

長谷川零餘子は俳人と云ふよりも才人であつたやうに思はれる。その零餘子の生前の苦手が此の寺島鷗笑だつた。

零餘子がホトトギスの地方俳句選者を去り、『電氣と文藝』と云ふ雑誌の編輯も辭し、懸賞俳句をモツトウにした「俳句の友」社を、加納野梅の後を享けて、いよくやり出すと極まつた時だ。「懸賞俳句とは何事じや」と同志を募つて、日頃の零餘子の持論を楯に取つて眞向から食つて掛つたのが此の鷗笑だつた。

それには足許から鳥が立つやうに驚いた零餘子、一夜、諒解を求めに鷗笑の家へ行つた。其の歸りである。どう云ふ譯か電車は満員だつた。

送つて來た寺島鷗笑は、満員電車の中で、懐中から、短冊を出して、釣草に獅嚙みついて居る零餘子に、さしつけた。

「何だよ？」

「書くんだよ、俳句を」

「此の電車の中ですか？」

「勿論、万年筆は貸してやるよ」

零餘子は奇妙な顔をした。が、あの寡黙な口唇に、にたりと笑を含んで、万年筆で短冊を認めた。

其處で、鷗笑は、

「おい長谷川君、俳句では矢つ張り君を先生と云ふぜ」

と云つた。その短冊は今も鷗笑秘藏してゐる。

此の鷗笑、元來が發明家だ。が、その發明が薬パンを作つてみたり、生姜を粉にしてみたり、失敗するど釣ばかりして居る。學校はアメリカでやつて來て、奥さんもアメリカ歸りと見えぬ日本的な美人だ。債鬼の云譯を敵國語で相談してゐるなどは奇抜だ。

鷗笑嘗つての研究は、羽田の黒田家の森の鶉の食料問題と、一升榊に蠅は何匹詰まるかとの計算、蟹はダンスすると云ふ論文の完成だつた。今は六郷川の砂利總數と盜賊の數との比較研究で

も、やつてゐるのだらう。

近作に、

石に馴染まず花壇に淋し鳳仙花
此の瞳東京を見ぬ秋の風
東京をはなれてさびし秋の空
章魚突きの舟近づきて鴨立ちぬ
底の章魚を覗きて秋の深かりし
秋の水に心澄みたり章魚を見る
指觸れては章魚鳴かせたり磯の秋
秋の水に章魚の逃げゆく色を見し
動く章魚の月に影ある砂地かな
袋の中の章魚に聲あり月淋し
動く章魚を提げて戻りぬ月の宿
月の濱に章魚を這はせて笑ひたり

秋の灯を近づけて章魚の動き見し
がある。

望月霑衣

霑衣は坊さんではない。併し、淺草の觀音さまの會計さんだ。お賽錢の大元締、しかも義兄が貫首大森亮順大僧正、息子が淺草寺支院の住職で駒込中學の先生だ。義兄と息子に、平氣で頭を下げて、左の句を作つて、笑つて居る。書は達人。

淺草寺僕として老いて茶飯かな

處が霑衣、薄暗い傳法院に納まつて、所謂モリエールの『厭人』者だ。俳句は淺草寺一山の僧侶、寺僕を指導し、雪中庵増田龍雨に尊敬され乍ら、ちつとも世間に出た事がない。賽錢の勘定と俳句の生涯。けだし消極的崎人と云へやう。近作に左の句がある。

半葩を打て地に落つ一葉かな

尾崎放哉

退職手當を二萬圓やらうと云はれて、

「いらねえやい」

とは、如何な江戸つ子でも啖呵が切れなからう。

處が、尾崎放哉は朝鮮の會社を辭める時會社が、二萬圓の慰勞金を出さうと云ふのを、『いいません』と、きつぱり斷つてしまつた男だ。それ處ではない、最愛の妻君さへ、何處かへ振り棄てゝしまつた。

そして、入つた處が京都の一燈園、それから智恩院内の常照院の寺男だ。これが俳人放哉が、一高を出て、法學士として東洋生命に入り、大阪の支店から、本店の契約課長を勤め、朝鮮に生命火災保險會社を創立しに渡り、しかも好成績で、豪華な生活をして居たと云ふ男の成れの果だ——と云ふと悲劇めくが、さうぢやない、そんな生活が煩はしいと云つて、俳句三昧に入りたいた爲めに、ぼい、と擲り出したと來てるから凄い。

しかも酒に酔ふと云ふので、その寺男も追はれて、須磨寺に行き、小濱の常高寺に行き、あちこち、さまよつて、貧乏の味を、腹一杯味はつて、とう／＼最後は、小豆島の『海の見える』—小庵に、焼米を嚙り、番茶の煮出したのと、井戸水を、がぶ／＼飲み乍ら、

「死を最も早く、そして安住して自然に受入れる事の出来る、只、それ迄、句作を生命とする——」

ことを、唯一の現世の希望として、大往生を遂げてしまつたとは、これこそ後世に傳はる、現代俳人の騎行として隨一のものだらう。

その句も面白い、流石に井泉水氏に傾注したゞけあつて、眞情が盛りつくされてある。

入れものはない両手で受ける

晝ふかぶか木魚ふいてやる禿けてある

明日は元日が来る佛と私

糸瓜が笑つたやうな圓右も死んだか

この境地、痛快ではないか、だが痛快と思つては成り切れない境地ではある。

太田道灌と江戸城

太田道灌は聖將である。道灌が大楠公を思慕したことは非常なもので、大楠公の心事を體得したものに、前に太田道灌あり、後に水戸光圀ありとは、私の感激してよく云ふ處である。

道灌は其の人格、識見、才能共に一世に卓越して居た。しかも文武兩道を極め、特に築城の術

に長じた。

此の太田道灌が、江戸城を築いたのは康正二年に起工して長祿元年に成つたと傳へられる。

一書に、太田道灌は當時、武藏國、荏原郡品川の館にあつたが扇ヶ谷の上杉家正の處へ行つた歸りに、江の島辨天祠に參詣し、船で歸館したが、海上で一尾の鰻魚躍つて舟に入つたのを見て

「在來、魚の船中に入るは瑞祥である。鰻は（このしろ）とも云ふ、古歌に

あづまなる室の屋しまの夕けふり

誰がこのしろをつなじやくらん

とある。このしろとは即ち此城である。今城地選定の折柄、時にとつての吉兆である。

と大いに喜んで、それから頻りに城地の位置を偵察した。

最初は豊島郡の北であり西ヶ原の前である一地を選定したが（これが今の道灌山である）と云ふしかし、一説には道灌山は、關道閑なる人の居所であつたと云ふ）どうも不十分な點がある、其他、稻付の台、元吉祥寺の台（今の駿河台邊）等を偵察したが、これ等も意に満たないので、遂に千代田、寶田、祝田、諸村の點在する荏土の地形に着眼した。此の地は地相雄大であつて位置高低共に缺點がなかつたので、此の地に起工することに決した。

幸ひに、千代田村は弟若狭守の領地であり寶田村も弟源八郎の所領であつたので、此の千代田若狭守、寶田源八郎を奉行として石を運び、木を集め、土壘を築き、塹壕を掘り晝夜督勵した。と記されてある。

又、今の小傳馬町は昔の千代田村であり一名六本木村とも云つた。此處は往古は奥州街道であり、此の村長宮邊氏と稱するのは、千代田若狭守の臣長野又四郎正友の末である、小傳馬町に千代田稻荷と云ふ祠がある、これは昔、千代田若狭守が狐を救つて、その報恩を享け渴仰して湯島の郷に諏訪の社のあつた土地へ穀倉を建て千代田稻荷を祀つたのであるが、その後、今の社地に移し、一社に祝ひて千代田兩社と云ふ、と雄飛録に載せられてある。

足利時代の關東の交通路と江戸の關係は、

一、鎌倉から小机(神奈川北方)、大井、品川を経て、江戸附近に至る(永祿年間の地圖に據れば、道路は江戸城の西方を通過すると一書に、豊島驛、或は平川村はつまり今の大手町附近で、こゝに昔驛家があつたと云ふ)これより荒川、つまり隅田川を隅田の渡津(石濱即ち今の待乳山附近で、武總兩國の境界である)で渡り下總に向ふもの。

二、江戸附近から、稻付、岩槻を経て、古河結城方面に向ふもの。

三、藤澤から境川に沿ひ、鮮間に出て、關戸(今の蓮光寺附近)を過ぎ、分倍河原を横ぎり、府中川越、館林を経て野州、總州方面に向ふもの、此の道路は最も大きかつた様である。

四、川越、松山、鉢形附近を経て、上州平井若くは白井に出て、之から越後に通ずるもの。

この他、武藏野には、到る處に小道、細徑があつて、人馬の往復、馳驅に妨げなかつたと傳へられる。

従つて、江戸城を中軸に河越、岩築の兩城を戰鬥軸としたことは、太田道灌の當時の狀勢に於ける非常な遠見であつた。道灌が關東の平和を念じての奮闘も、讒者の爲に、暗君定正の嫉妬を購ひ、その高雅な人格からして、潔く死地に赴かせ半途に終つたのは、かへすがへすも殘惜に堪へない。

道灌の築城の巧妙さは、徳川家康入關の際迄殘存して居た富士見櫓を以て知られる。これは八方面の櫓であつて、どの方向から見ても同形であつたと云ふ。しかも如何なる大旱にも水の減じない井戸が城中に五、六もあつて道灌が飲料水に深く注意したことが知られたと傳へられる。

道灌その人に就いても書くことは多く、江戸城に關して述ぶべき點も多々あるが、それは他日に譲つて、とにかく江戸城が何等非難する處なき文武兩道の達人聖將によつて創築されたと云ふ

ことは私達にも嬉しいのである。太田道灌は、もつと研究され、崇敬されてよい人傑であつた。

四十七士の運不運

討入を芽出度済ました赤穂浪士は、さて、斷罪迄、四家に分けてお預けとなつた。

一緒に、同じ目的で、同じ仕事を爲したのではあつたが、此の四軒へ分配せられた人々は各々違つた環境に置かれてしまつた。

細川家へ預けられた大石内藏助達十七人は幸福であつた。主人は肥後熊本の城主、従四位越中守綱利、文武に秀で、しかも水戸光圀の甥である。義士を預るのを榮譽として、既に内藏助は引き取られる時、黒無地羽二重の小袖に浅黄羽二重の下着を貰ひ、他の義士も、同じ衣服を貰つたのである。

それから、大目附仙石伯耆守の家から細川家へ来る時も、特に越中守の思召とあつて、途中義士が、のぼせるといけないと云ふので、駕籠の窓を明け放たせ、駕籠一挺に細川家の定紋ある提

燈二張、これへ、騎馬一人徒歩番二人づゝを付き添はせた程で、まことに町重、士を待つに至れり盡れりであつた。

が、同じ討入をした者で、三州岡崎の城主水野監物に預けられた間十次郎等九人は、罪人扱ひにされて、駕籠に一々錠を下ろされた。

又、酷いになると、長門長府の城主毛利飛騨守に預けられた岡島八十右衛門等十人、乗物へ悉く網をかけられた。まるで破廉恥罪を犯した人間と同一に扱はれた譯だ。

流石に、主君の仇討以外には何もない義士達でも、此の取扱ひには些か腹の蟲が納まらなかつたらしい。血氣の武林唯七、小野寺幸右衛門などは、満面朱を注いで、乗物の網を睨めつけたと云ふ話だ。

第一番の待遇が細川家、第二番が、大石主税達十人を預つた伊豫松山の城主松平隠岐守、ひどかつたのが、毛利、水野の兩家の待遇であつた。細川家が義士に對する待遇を聞き傳へて他の三家も、それ／＼改めて行つたが、最後の切腹迄、とにかく非常な相違のあつた事は事實である。すべてを爲したえた義士達の心に、一點不快の念を抱かせたことのあるのを、私は今でも悲しく思ふ、しかも切腹の日、毛利家へ預けられた人々の死は思へば氣の毒な程で、短刀を載せる三

寶もなく、八寸臺の上に乗せてあつたと云ふ。だからして、毛利家へ預けられた村松喜兵衛、武林唯七、勝田新左衛門、小野寺幸右衛門、吉田源右衛門、倉持傳助、杉野十平次、間新六、前原伊助、岡島八十右衛門は、不倖せぬ最後を遂げた。

これは後に、快氣に逸る江戸の人間を、うんと憤慨させてしまった。それかあらぬか、毛利飛騨守は、赤穂義士の十七回忌に、氣が狂ひ、本家分家の大争ひを惹き起し、たうとう、知行は没收、本家へ預けの身となり、家名が断絶してしまつた。

四十七士の子供達十九人は、皆、遠島仰せつけられた。しかし、幼年の者は十五歳になる迄母の手に預けられ、其内出家する者は遠島御赦免と云ふことであつた。

十五歳以上の者と云ふと、吉田忠左衛門の子傳内、間瀬久太夫の子定八、中村勘助の子忠三郎、村瀬喜兵衛の子政右衛門、の四人で、これは伊豆の大島へ流されたのである。しかし、翌年、皆免されて、それ／＼召し返されたのであり、何と云つても義士の子だからと云ふので九歳や十歳の者に二百石、三百石、多いのは五百石、千石と云ふ大祿を以て、争つて各藩に抱へられたのであるが、こゝに哀れを止めた一人がある。

それは既に二十歳になり、姫路の城主本田中務大輔に仕へて居た間瀬九太夫の子間瀬定八、伊

豆大島に流人の生活をして居る間に發病し、赦免を待たずして黄泉の客となつてしまつた。

間瀬定八の墓は大島元村の墓地にある。椿咲く大島に、あはれ不運の義士の子の墓のあるのを知る人は尠い。弔つて貰ひたいものだとは大島遊覽の人に希望する。

不遇の死を遂げた義士の中の一部の人々の事を考へ、そして、榮譽ある義士の子であり乍ら、たゞ一人、流人として死んだ間瀬定八の事を思ふと、私は不思議に聯想が、東北地方が凶作と聞くと飛ぶ。

東北の人は勤勉な努力家が多い。そして人柄も、狡猾なのは尠く、朴訥な人に充たされて居るにも係らず、何と、昔から、幾度もの凶作飢饉に見舞はれる事であらう。

東京や、大阪や、大都市に隣接する村のお百姓さん達は、都市の發展に伴つて、地主となり家主となり、富豪となり、地價の暴騰で、野良着から洋服に替る人が實に多い。それと、東北地方のお百姓さん達の境遇とを比較すると、同じ義舉を果して、細川家に預けられた人々と、毛利家へ預けられた人々とを比較するやうな、うら悲しい感じに打たれてならない。

が、毛利家へ預けられた人々が、冷遇されたゞけ、一日も早く亡君の膝下に行きたいと、死の光榮を願ひ、死を、最後を、好遇された人々より以上に嬉しく受取つたことに、私は幸福を見出

したい。同時に自然の風景に恵まれ乍ら、時折凶作の爲めに虐げられる東北の農家に、せめても近隣が朴訥な人情美、努力美を持つて居るのに幸福を見出したいのだ。それは辛い、世界ではある。が、然し乍ら油断のならぬ周圍に、須臾も警戒心の休まらない、不安定な生活の豪華より遙かに尊い、人間らしい存在であることを私は思ふ。

日本動植物の逸話

八重 躑躅 風流

弓を取りては東海屈指の名人と許された尾張の山田次郎源重忠は、家臣藤兵衛尉達を引連れて所領を見廻つた。そして疲れて、ふと山寺にお茶を乞ふた。

「ほう！」

嘆聲を洩らした山田重忠は、矢庭に跼んでしまつた。

美くしい八重つゝじが、重忠の鼻の先で、今を盛りと咲き誇つて居るのだ。

「殿！ お茶を」

と呼ばれても、

「ふむ」

と口の中で答へるだけで、尙も八重つゝじの枝振りから、花のつき工合に惚れ／＼として眼を離さない。

やゝあつて、山田重忠は、つゝましく坐つた主の法師の傍に立つた。

「主！ そなたは幸福者ぢやのう」

「はい、はい／＼」

法師は衣の袖を合せて、八重つゝじの方へ眼をやつた。

「呉れないか？」

と、山田重忠は咽喉へ出た聲を、ぐつと押し戻した。餘り重忠が、しげ／＼と、八重つゝじを見るのに、不安を感じて居る法師の心が判つたからだ。

「つゝじを大切にのう」

歸る時に、重忠は、さう挨拶した。

「は、はい、いえ、私の生命で御座いますから」

法師は慌てゝ云つた。

館へ戻つても、あの山寺に誇らかに咲いた八重つゝじが、文武の達人山田重忠の験から消えなかつた。

處が——聞もなく、八重つゝじの主の法師は兇賊をかくまつた罪に問はれた。

佛に仕へ、そして、あれほど八重つゝじを愛する法師だ、つい逃げ込まれて、已むを得ず、かくまつたことは山田重忠、よく知つて居た。

しかし、罪は罪。

それで、藤兵衛尉を使として、科料として七匹四丈の絹を差出すか、八重つゝじを差出すか孰れかせよと申渡した。

貧乏な山法師に七匹四丈の絹は大變である。しかし、藤兵衛尉の言葉を擬つと聞いてゐた法師は、直ちに、

「はい、七匹四丈の絹を差出します程に、八重つゝじは、どうか御勘辨下さいませ」と願ひ出た。

聞いた藤兵衛尉は心の中で、

「殿は八重つゝじを熱望して居られる」

と叫んで、こりやどうあつても、八重つゝじを召し上げて主君の御機嫌を取らねばならぬと考へた。それで、

「これ、貧しい法師の癖に、殿が特につゝじで勘辨してやらうと仰せられるお心持ちが判らず、七匹四丈の絹の方を差出すとは以ての外の不所存者だ、其方の爲めに悪い、八重つゝじを差出してお詫びせい」

と、強ひて八重つゝじを差出させてしまつた。

法師は是非なく、泣く／＼八重つゝじに別れを告げた。藤兵衛尉は、得意になつて、

「殿！ たうとう八重つゝじを召し上げて來ました」

「ふむ」

山田重忠は、館へ來て八重つゝじが一段の美を添へたのを、つくづくと眺めた。

「あゝ！ 立派なものだ」

と嬉し氣に嘆息すると、藤兵衛尉は、また、

「何しろ、法師奴、どうあつても八重つゝじを出せと申しましたら、おい／＼聲をあげて泣きま

した、はゝゝゝ」

「うむ、さうであらう」

山田重忠は、沈黙した。

そして、

「氣の毒な事をした、さぞ辛かつたらう！」

しみじみ、述べた。

「藤兵衛尉、直ぐ此の八重つゝじを法師の手に歸せ、そして、わしの贈物だと傳へい」

「へつ」

藤兵衛尉、變な顔で重忠を眺めた。

藤兵衛尉が、八重つゝじを法師に届けて、重忠の言葉を傳へると、法師ははらくと落涙し

た。そして、

「そのやうに思はれる方の手に渡つてこそ、つゝじの幸福で御座います、それに罪科の爲めに召されたもので御座います。殿の有難い心で、法師は八重つゝじ無くとも生きて行けます。どうぞ快よく御受取下さいますやうに——」

と今度は喜んで八重つゝじを藤兵衛尉に差出した。

「何ちやこれは？ 八重つゝじを、あつちへ持つて行つたり、こつちへ持つて來たり、えゝいまいましい」

噫！ 無風流漢には弱つたもの、藤兵衛尉は、

「使ひ賃だ」

と、八重つゝじの下枝一本、へし折つて、襟にさして歸つた。

梅の仙人

西丸の新番組春田四郎五郎は有名な梅の愛好者で、數百種の梅樹を集めてゐた。

そのことが、いつしか將軍家の耳に入つたので、春田は、その内勝れたのを三種ばかり差出した。それが又、素晴らしいものだつたので、將軍家から仙洞御所へ御進獻になり、又、それが光格天皇へ獻上せられ、歡感斜めならずとことが洩れ傳つて、春田四郎五郎は大層な譽れを得た。

これを聞いた松平樂翁公は、是非とも春田の梅が見たくなつた。其處で、分家の松平志摩守に春田方へ梅見に行つてもよいかと尋ねさせた。

「結構です、どうぞ」

春田が快く承諾したので、松平志摩守は改めて、春田の家を眺めた。
と、どうだらう、春田四郎五郎の家は、疊は赤ちやけて破れ、鴨居は折れたまゝ、それに雨戸などは、がたびしやで、雨漏りの跡が到る處異様な模様となつて居る。

「うむ、こりや酷い！」

松平志摩守、さう思つたので膝を進め、

「春田どの、松平樂翁公が参られるのであるから、その前に、勘し家に手入れをなさつては如何で御座る、甚だ失禮乍ら、入費は拙者から差上げるが——」

と云ふと、春田四郎五郎は、むつとして、

「樂翁公は拙者の家を御覽においでなさるのか？」

と反問した。

「いや、それは梅見であるが、餘り家が破れ果てゝゐるからのう」

松平志摩守は、折角の言葉を無にされたので腹立ちまぎれに云つてのけた。

「失禮にあたると思つてのう」

「ほう」

意外氣に云つた春田四郎五郎、

「左様な煩はしいことなら、たとひ樂翁公であらうと何であらうと、梅をお見せ申すことは、お断りする」

と、はつきり答へた。

「まあ、それでは心任せに、たゞ梅を見せて貰へばよいから」

と、松平志摩守、匆々に歸つて、このことを樂翁公に傳へた。

それから五、六日の後、樂翁公は春田四郎五郎の家へ梅見にやつて來た。

見ると、勘しも繕つたところもなく、折れた鴨居は藁縄で綴つてあるばかり、そして御馳走と云へば、臺所に懸けてあつた澁茶ばかり。

「呆れたもんだ、茶菓子も無い！」

松平志摩守、思はず呟いた。

歸つてから、松平樂翁公の機嫌はどうかと志摩守が伺つてみると、

「志摩守どの、今日は面白かつたのう」

「はあ」

「春田四郎五郎と云ふ男、實に天晴れなものぢや」

「へえー」

「余は生れて始めて御馳走になつたぞ」

「と仰せられるのは？」

菓字も出ないで、何が御馳走か、と志摩守頬を膨らせた。

「あの茶釜のお茶だ、あれは實に珍らしい、味も此の上ない、余は、珍らしいので二ふく立て續けに呑んだ。あゝ、春田四郎五郎は梅を愛する本當の人物だ、梅の仙人、天下の風流人と云ふのは、あゝ云ふ男のことだ」

聞いて居た松平志摩守、改めて、荒れはてた春田の邸を思ひ浮べた。

そして、心のうちで、

「風流と云ふものは、むさくるしいものだなあ！」

と感心した。

蜂を自由自在に

保元の頃、太政大臣藤原宗輔公は非常な蜂好きであつた。

「蜂は仁智の心がある」

と云ふのが藤原宗輔公の持論だつた。

で、宗輔公の邸宅には蜂が幾種類となく飼つてあつた。

しかも、その蜂を、みな巧みに手慣づけて、蜂は、宗輔公の意志のまゝに動くやうになつて居た。

宗輔公は有名な風流人、蜂に何丸、何丸と名をつけて愛し、時々、家臣の中に不届者があると

「何丸、刺して来い！」

と命令されると、忽ち、ぶーんと飛んで行つて、ちくりと刺す。

「勘辨してくれ！」

と叫んだつて、買収しようとしたつて、對手が仁智の蜂だ。情容捨のあらう筈もない。

翌日は、腫れた頭を抱へて出て来る。

「ほゝう、貴殿も」

「貴殿もか」

と呆れる仲間を見乍ら、

「しつかりせい」

と宗輔公のお叱りだつた。

此の藤原宗輔公の出仕の時が又、見ものであつた。蜂が、車の上を飛び廻るのを、

「止め！」

と號令をかけると、ばつたり多くの蜂が車の上に止まつた。

で、當時、宗輔公を「蜂飼の大臣」と稱したが、不思議な徳を持つた人もあればあるものだ。

芋蟲と武田信玄

如何に英雄豪傑であつても、嫌ひなものには閉口する。

武田信玄は、云ふ迄もなく戦國の豪雄であつた。が、どう云ふものか生來、芋蟲が大嫌ひであつた。

或時、信玄は家來を集めて、勇氣について、いろ／＼と物語つた。

すると、武田家の勇將馬場美濃守信房は、元來皮肉家であつたから、にたり、と笑つて座を立つたが、間もなく、にこ／＼し乍ら、三方を捧げて持つて出た。

「何ぢや」

と信玄公、訊すと、

「はつ、君の御勇氣でも、よもや、これを手取りにはなされますまい」

馬場美濃守が、ぐいと差出した三方を見ると、驚くべし、芋蟲が、うちやく／＼居る。

「うむ」

と唸つた武田信玄、

「慮外者奴がつ！」

と、大喝一聲、むづと、芋蟲を手掴みにした。

「が、その指、その掌は、すつかり色が變つて居た。」

蜘蛛と忠直卿

これに似た話は越前少將兵部大輔忠直卿の蜘蛛厭ひだつた。

何しろ結城秀康の子、家康の孫だけあつて、事毎に物荒い人だつたが、妙なことには、蜘蛛を見るに一縮みになつて怖ろしがつた。

で、或時、小姓共を集めて咄しをして居る處へ蜘蛛が這つて出て來た。

いたづら盛りの小姓は、忠直卿が怖がるのを面白がつて、そろそろと蜘蛛を追ひ立て、忠直

卿の傍へ這つて行かせた。

と、それを發見した忠直卿、かつと怒つて、

「誰れでも好き嫌ひはあるものだぞつ！ しかし、余が蜘蛛を怖がるのは、女が蛇を見て眼をまはすのとは違ふのだぞつ、よく見て置けつ！」

と云ひざま、蜘蛛を指で搦んで、膝頭を引きまくつて、蜘蛛を、ぐつと押しつけた。

「はつ」

小姓等は蒼くなつて眺めて居ると、しばらくして、

「見よつ！」

と潰した蜘蛛を投げ出した。

「余は嫌ひぢや。が、嫌ひぢやとて、堪へやうとすれば、この通りぢや」

と膝を出して見せた。膝は蜘蛛の形のまゝに血が寄つて跡がついて居た。

「余が嫌ひと知つて、わざと蜘蛛を追ひ立てる不所存者、以後、きつと心得ろ！」

忠直は、小姓を睨みつけて叱つた。

獺と勤王

土佐藩勤皇の士片岡孫五郎とは片岡直輝、片岡直温兩氏の父である。孫五郎氏夫人のぶ子は有名な女丈夫、貧窮の極にあつて良く良人をして正義に赴かせ、二兒を養育したものであつた。

始め土佐藩では、御多分に洩れず、佐幕に傾いて居た。それを武市半平太、川原塚茂太郎、島村壽之助、吉村寅太郎などの輕輩が眞つ先き驅けて勤皇の大義を唱へたものだつた。

そして片岡孫五郎の家は、これ等志士の密會所だつた。

處が、脱走藩士を隠すにも響應する米もない有様、信子は手仕事をして一生懸命家計を助けた。が、どうしても金が足りない。

思案に餘つた信子は、良人が旅行中なので餘計に胸を痛め乍ら、裏手の藪續きの池の方へ、ぶら／＼と歩いた。

ふと眼についたのが獺。

「おや？あんな處に獺が居る！」

信子の眼は輝いた。

その筈だ、獺の毛皮は當時でも高價で珍重されて居たからだ。

「あれを生捕りにして賣らう」

信子の心は急に明るくなつた。

その夜、信子は下僕に良を掛けさせた。

「獺よ！ どうぞ勤皇の爲めに身を犠牲にしてくれ！」

信子は祈つて寝た。

朝早く起きて見ると、獺は、ちやんと良に掛つて、きよとんとした眼をしてゐた。

「おゝ〜」

信子は嬉しさうに叫んで、又、考へた。

「待てよ、獺は牝と牡と二匹居る筈に違ひない。どうせ、お國への御奉公、も一匹良に掛つてく

れ、そして夫婦共々お役に立つてくれ」

そして、その晩も亦、良を掛けた。

と、果せる哉、翌朝、又一匹捕れた。

「獺にも大義は判る」

信子は、すつかり喜んで、それを孫五郎の歸宅迄取つて置かうかと思つたが、何しろ差し迫る家計の苦しさと入費に、持ち堪へられず、下僕に市場へ持つて行かせて、金ではなく篠卷若干と

取り換へさせた。

篠卷と云ふのは木綿糸を拵へる綿、それを毎日々々丹精して絲車にかけ、絲にして機に織と、利潤を得て、時ならず志士達と家計の入費に役立たせた。

三百石の絲屑

土井大炊頭利勝は居間で、ふと一尺ばかりの唐絲を見付けた。

「誰れかある？」

「はつ」

次の間から大野仁兵衛が罷り出た。

「これを其方に預ける、大切にいたせ」

土井利勝は一尺の唐絲を大野仁兵衛に渡した。

「かしこまりました」

謹んで大野仁兵衛が次の間へ下がると、見て居た若侍達は、

「どうだい、絲屑を頂く大野仁兵衛も仁兵衛だが、殿様も殿様だ、大名らしくもない。あんな絲屑は掃き棄てさせりやいゝ、吝だなあ」

と笑つた。

それから三年の月日が経過した。

或る日、大炊頭は大野仁兵衛を呼び出して、さて、

「先年、其方に預け置いた一尺計りの絲があつた筈だが如何いたした？」

と改まつて訊ねた。

大野仁兵衛、はつ、とかしこまつて忽ち巾着を取り出して、その中から絲屑を引き出した。

「これに御座いまするか？」

「うむ、それぢや」

と云つて土井利勝は受取つて、脇差の下緒の先が解けて居たのを結びつけた。そして、

「寺田與左衛門を呼べ」

と云つた。

家老の寺田與左衛門が出て來ると、利勝は

「與左衛門、これを見よ、三年前に落ちて居た唐絲を仁兵衛に預けて置いた處、仁兵衛は大切に
して巾着の中へ納め置き、只今訊ねると直ちに取り出した。三年前、預けた時には若侍達が、余

を吝なものゝ笑つた事はよく承知して居る。それにも係らず主の命令を大切に出来たことは仁
兵衛奇特の至りだ。三百石を加増せよ」

と申渡して、みんなを、呀つと云はせた。

そして、利勝は家臣に訓へた。

「余が此の絲切を大切にした譯は、この絲は唐土の土民が桑を植ゑ、蠶を飼つて、絲にしたもの
だ。それを唐土の商人が賣り捌き日本へ渡つた京都大阪の町人が買ひ取り、江戸へ下つて來たも
のであるから、其の勞苦と功は大變なものである。それを少しばかりだとして棄てしまつては、
天道の冥加も恐ろしいではないか、三年経てば、斯様に下緒の先がくゞれる。どうぢや、余は三
百石で此の絲屑を買つたのぢや、はつはつはつ」

家臣一同は名君の言に、はつ、と下げた頭が上らなかつた。

大根の禮廻り

徳川家光が御鷹の鳥を家臣へ振舞つたことがあつた。その時、剛直の士天野彌五右衛門も登城
して、そのお吸物を頂戴したが、翌日御老中方への御禮廻りに、他の者は、みんな、
「昨夜は御鷹の鳥頂戴いたしました有り難う存じ奉る」

と挨拶したのに、一人彌五右衛門だけは、

「昨夜は御鷹の大根澤山頂戴いたしましたして有り難う存じ奉る」と云つた。

松平伊豆守は聞きとがめて、

「鳥を下されたのに大根の禮を云ふとは何事ぢや」

と云ふと、彌五右衛門、濟まして、

「されば御觸には鳥を下さるとあつたが、頂戴しました時は、大根ばかり澤山頂戴しましたから大根と申上げたのです。若し大根でなく、あれが鳥だと仰せなら、鳥を下さると書いたものと、事實大根を盛つたものとを、つき合せて下されば判ります。拙者は斷じて大根だけしか頂きません！」

と頑張つたので、流石の智慧伊豆も一言半句もなかつた。

彌五右衛門の奇行は、こればかりでなく、例の吉良上野介が殿中で淺野内匠頭に斬りつけられた時も、早速行つて對面して、

「貴殿が烏帽子をかぶつてゐたから、その輪金で淺疵で濟んだとの話、一つ烏帽子を見せてくれ」

と上野介に烏帽子を取り出させ、

「ほう、これが即ち貴殿の命の親か、ありがたしく、お神酒でもあげて祭らぬと、烏帽子に罰があたり申すぞ、はつはつはつ」と嘲つて歸つた。

又、或日、彌五右衛門は空が低く、星が近く見えるのに眼をつけ、

「こんな時には地震があるものだ、氣を付けろ！」

と、屋敷の内外に、かすがひを十本ばかり打ち込ませ、大貫を調べて、彼所此所へ筋違ひを打たせた。

彌五右衛門の子供や家族は、

「弱つたものだ、頑固親爺が讒碌してしまつた！」と笑つた。

處が、彌五右衛門が大騒ぎしてから三日経つと、果せる哉大地震があつて、お城から大小名の屋敷、市中の家も大破して即死や負傷者を夥しく出した。が、しかし彌五右衛門の家だけは異常がなかつた。

「どうぢや、このわしを踏破したと云つた奴は出て来い！」
と威張られても、家人は仕様がなく、
「いーえ、お爺さんは偉いものです」
と讃め上げた。

猿の仇討

足利持氏は上杉憲實の讒言で、謀反すると思はれ、義教將軍の命で下つた上杉清方、一色宮内少輔の爲めに攻められて自殺した。

持氏の子義久の館にも軍勢は押し寄せて、義久も亦、自害してしまつた。

その時、寄手の中から力の優れた一人の武士が矢庭に躍り込んで七八人を切り伏せた。

すると、義久の傍に泣き乍らひかへて居た義久の手飼ひの猿が、つと立ち上つて庭に走り出たかと思ふと、

「き、き、き」

と齒をむいて、ぱつ、と寄手の勇士の肩に飛び上つたかと思ふと、

「呀っ！」

と叫ぶ間もなく、其の勇士の兩眼をくり抜いてしまつた。

流石の勇士、血みどろになつて倒れるのを味方の兵は忽ち討ち取つた。

「猿も恩を知る！」

義久の遺骸につき添つた人々は暗然とした。

蕎麥の花と謙信

例の川中島の合戦は武田信玄方が八千、上杉謙信の方が一萬三千で戦つたのであつたが、勇將上杉謙信も流石に老將武田信玄を破ることが出来ず、敗けて多勢を捨て、山越しに、越後をさして落ちた。

續くものは剛勇和田嘉兵衛、たゞ一人。

恰度、五六里ばかり走つた時だつた。

謙信は廣い、野原に大きな川の流れて居るのを見た。

「嘉兵衛」

「はっ」

「あれは何と云ふ川だ？」

馬上から指して謙信は訊ねた。

和田嘉兵衛は、妙な顔して主君を見た。

「川？ 川は、いづれにありまするか？」

「それ、其處に、あんなに大きく流れて居るではないか」

との言葉に、和田嘉兵衛は、

「あれは川では御座いませぬ、蕎麥の畑で御座います。今、花の盛りでありますからあのやうに白く、川のやうに見えるのです」

と答へた。

それを聞いた謙信は、

「あゝ！」

と、嘆聲を洩らした。そして、しみじみと、

「嘉兵衛、これは一代の恥辱であつた、わしは蕎麥の花を川と見違へたのか」

と溜息して、

「謙信ほどの大將が信玄との合戦に狼狽して、蕎麥の花を川と見るほど眼が暗んだかと思ふと、

弓箭の神にも見離されたか」

と、身もだへして苦しんだ。

牛の乗せ賃

建武の忠臣名和長年が、まだ幼なかつた頃のこと、牛を曳いた童が唄を面白く歌つて行くので長年は、あとを追つ驅けて、

「おい！ その牛に乗せてくれ」

と云つた。

すると牛飼ひの童が、

「乗せてやつてもいゝが乗せ賃に何を呉れる」

と問ねた。

「あの川端迄乗せて行つたら、さうぢや、わしの邸にあるあの大きな松をどれでもやる」

「さうか、そんなら乗つてくれ」

契約が出来て、長年は川端迄、その牛に乗つて行つた。

それから三年の月日が経つた。

ある日、一人の男が、童を連れて長年の邸へやつて来た。そして、長年の父名和行高に向つて「子供と云ふものは本當に仕様がありません、何でも三年前に、お邸の坊ちやんを川端迄、牛に乗せて行つたのださうですが、その時の約束に、乗賃は邸の大きな松だと云つて、その松を買つてくれと云つて、どうしても聞き容れません、まことに弱つてゐます」と語つた。

行高は長年に向つて、

「どうぢや、さう云ふ約束だつたか？」

「さうです」

長年は、はつきり云つた。

すると行高は

「その子の申す事は無理はない、約束は約束だ、松はどれでも好きなものを選びなさい」と云つて恐縮してゐる牛飼に、袖を呼んで門前の大松を切つて渡した。流石に名將の父だけはある。今に「名和の約束の松」と云ひ傳へられてゐる。

(終り)

昭和十七年十一月十四日 初版印刷
昭和十七年十一月十八日 初版發行

(三、〇〇〇)

隨筆歴史と人生

金壹圓八拾錢

認 承 協 文 出
號 180 31 7



著 者

松 波 治 郎

發 行 者

金 井 基 祐

印 刷 者

西 野 末 雄

東京市神田區西神田一丁目五番地

發 行 所

彰 文 館

配 給 元

東京・神田
淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

振替東京六一一九六番
電話九段三五二三番
會員番號一一二二二四

(印刷所 東東一一四 文化印刷株式會社)

有終會名譽會員
海軍大將 男爵

安保清種閣下題 字

陸軍中將 堀 丈夫閣下推薦序文

松波治郎先生著

(新刊)

隨筆 吉野朝

B 6 上製 三七六頁
定價二・二〇 送料・一五

あゝ！ 吉野朝！ 吉野朝こそは全日本人の心の郷里である。一切の高き情操、一切の人情美、一切の行爲の最高頂は吉野朝にある、吉野朝を慕ひまひらす心、そこに日本的な美しさの一切が含まれる。吉野朝遺跡巡歴挿繪と相俟つて宛ら讀者も共にある思ひの紀行史談挿話に興盡さず、古典美の世界の憧憬を充たし神國日本の自覺培養により人格陶冶、國民精神育成に資するもの、直權主義の立體的な生きた新歴史教育に資する快著。

松波治郎先生著

(新刊)

物語 軍神と聖將

B 6 上製 三〇〇頁
定價一・八〇 送料・一二

乃木大將や東郷元帥の物語は一億國民に何時でも絶大な感激を與へ無限の教訓を授ける。廣瀬中佐や橘中佐、近くは大東亞戰劈頭ハワイ眞珠灣の華と散つた海軍特別攻撃隊の軍神、更に荒鷲の軍神加藤少將の烈々たる殉國の熱誠と氣魄とに國民の誰か一人でも泣かずに居られやうぞ。嗚呼！ 人格一世に卓越し勳功萬世に敬仰さるゝ軍神と聖將の生涯は末代迄も人類の龜鑑である。

本書は先づ聖將乃木、東郷兩將軍の少年時代から説き起し、廣瀬中佐、橘中佐、岩佐中佐、横山少佐、古野少佐、廣尾大尉、加藤少將等、海陸空の軍神の生涯を物語風に愛國文壇の雄將松波治郎先生が齋戒沐浴、感激に獻歎し乍ら執筆されたもの、正しき情操の興趣に溢れ清純高雅の氣品高く、青少年教育の絶好資料たると共に國民必讀の大文字である。

松波治郎先生著

(新刊)

武士の子

B 6 上製 一七八頁
定價一・二〇 送料・一二

「さむらひの子と云ふものは腹が減つても、ひもじくない」と云ひ、愚痴と弱音は武士の禁物と云ふ。さむらひの子は生れ乍らに武士道で訓育せられる。だから正しく強く明るく如何なる苦難も突破して、たゞ一心忠誠の士として殉ずることを念願として居る。戦國時代の少年城主や英傑、殉忠報國の維新の志士、明治の元勳等が、少年時代、如何にさむらひの子としての覺悟に勇ましく行動したか、どんなに正しく強く明るく立派であつたか、苦難を蹴飛ばして立ち上つたかを呼吸もつがせぬ面白さの中に示したのが本書である。一億總武士である現下、國民學校上級用として、又、新少年文學の先驅として青少年の渴を醫すべき好著である。

目次

少年城主織田信長——奇人蒲生君平——清貧純忠榊田雲演——志士頼三樹三郎——伊豆の吉田松陰
——賢者の子櫻任藏——乞食の神様となつた橋本左内——海援隊長阪本龍馬——天誅組軍事總督松本謙三郎——盡忠の人柱河合父子——初代の武徳會長渡邊昇——公卿の子西園寺公望——足柄の子山縣有朋元帥——槍の名人大山巖元帥

— 書評好大・刊既 —

廣島高等工業學校教授
理學博士 森本清吾先生著

工業技術者用 手輕に 解かる 高等數學

A 5 版上製
二百五十頁
定價金二圓三十錢
送料金十五錢

東京商工會議所
珠算振興委員會委員 山本長五郎先生著

珠算精義

A 5 版上製 函入
四百四十六頁
定價金四圓五十錢
送料金十五錢

文學士 植島清一先生著

時局新語解説

A 6 版上製
三百二十二頁
定價金一圓四十錢
送料金十二錢

終



彰文館